

《書評》

Rita Felski,

The Limits of Critique

Chicago: U of Chicago P, 2015.

勝田 悠紀

「文学の危機」というフレーズが文学研究者の間で、まるで合言葉のように囁かれているのをよく耳にする。確かにこの業界で何もかもがうまく行っていると確信を持って言える人は多くないだろう。しかしその言葉は、具体的にどのような事態を指しているのか。近年の創作が低調で、読むに値する作品が出てこないと主張しているのか。人々の「活字離れ」や「文学離れ」、出版不況のことを言っているのか。諸芸術のなかでいわゆる「純文学」の相対的な地位の低下に歯止めがかからないことが不安なのか。それとも大学という制度のなかでの「文学部」の軽視（あるいは蔑視）が、その縮小や廃止をもたらしてやまないことへの不満だろうか。あるいはまた、「文学部」から発せられる声が、社会に届かなくなっていることへの苛立ちだろうか（このうち特に「英文科」に関するトピックとして、近年では英語教育の問題があった）。

こうした状況を、大学にいる研究者の側は、ともすれば正しい「我々」の考えが「時代」や「世間」に——不当にも——受け入れられないという枠組みのなかで認識しがちだ。しかし本当にそうなのかと問うのが、リタ・フェルススキの『批判の限界』（2015）である。1989年に *Beyond Feminist Aesthetics* でデビューして以来、フェミニズム批評や文化研究などで活躍してきたフェルススキは、自身の仕事を振り返りつつ、これまで自分たちが開発し洗練させてきた物の見方や批評の方法が、受け入れられないどころか、むしろ十分に広まり浸透した状況として現代を捉える。その上で、で

は何がうまく行っていないのか、これまでの批評の蓄積のどの部分がどのような仕方で共有され、それがどのような失調感につながっているのか、というように問いを設定するのである。

フェルスキが提示する見取り図は以下のようなものだ。フェミニズム批評、クイア批評、ポストコロニアル批評、カルチュラル・スタディーズ、新歴史主義などに代表されるここ3、40年の様々な批評理論の潮流は、ある一つのモードを共有してきた。それが本のタイトルにもある「批判＝クリティーク」であり、ポール・リケールの用語を借りて呼ばれる「懐疑の解釈学」である。テキストは何か(典型的にはイデオロギーや無意識)を隠しているはずであり、読む行為とはなによりもまずこの隠された次元があるのではないかと疑ってそれを探り当てようとする営みだ。「批判」＝「懐疑の解釈学」はそうした読者の態度に関する概念であり、想定された読解行為やテキストのあり方を表す用語である。フェルスキによれば現代批評における「懐疑の解釈学」への志向は、意識的な方法論というよりも、「ムード」や「気分」、「空気」のようなものとして共有され、ほかの「気分」を締め出すことによって硬直化している。「批判」的であることはいまや知性や誠実さの指標としてなかば強迫的に作用しているのだが、これは情動的な「気分」のレベルで伝染するからこそ広く共有され、一つのパラダイムとなっているのだ。このような状況は日本にいる我々も身の回りにかなりの程度感じることができるはずである。

フェルスキはこうした認識の上で、批判＝懐疑の解釈学がどのようなものか、具体的な考察を展開していく。「批判」はまず、「掘り下げること」(digging down)、「下がってみること」(standing back)という二つの空間的な要素によって規定される(第2章)。作品や世界を表層と深層の二層なものとする「批判」は、表層がまやかしである可能性を常に警戒しながら、深層＝真相を探っていく。批評の手続きとして、見出される深層は肯定的なもの(「転覆的!」)であっても否定的(「共犯関係!」)なものであっても構わない。この垂直的な軸に対して、対象から距離を置くという水平的な軸がある。対象に埋没していたのでは囚われてしまう自然化作用に抗うため、対象から離れることが必要であり、そこで行われる典型的な活動は「異化」ということになるだろう(なおフェルスキは垂直、水平の二つの軸が、

批評史のなかではこの順で前景化してきたとし、表層・深層のイメージは水平軸の段階においては逆転した形で——深層がまやかして表層こそが隠された真実だというように——残るとしている(80)。続いてフェルスキは、批判は探偵による捜査という「時間性」、「物語性」を備えていると話を進めていく(第3章)。批評家は探偵として、テキストの犯行現場を突き止めるべく力を尽くすのだ。

フェルスキによる「批判」論の魅力の一つは、「批判」をこのように空間性のイメージや時間性・物語性のレベルで捉えたことにあるように思われる。「ムード」や「気分」といった曖昧で看取しにくい形で浸透している「批判」を具体的に取り出し分析するにあたって、現代の様々な表象に注目していくための足がかりを与えてくれるように感じられるからだ。例えば、「深さ」が消失したと言われたポストモダンのあとで、現在芸術的表象にある種の「深さ」の回帰と呼べるような現象が見られるとして(van den Akker, Gibbons, and Vermeulen, Section 3)、それが今日の社会における「クリティーク」的なものの浸透と何らかの関係を持つと考えることが可能になる、というように。あるいはより大きな時間スケールのなかで、「批判」を近代文学史の問題として問い直すような道もありうる。ごく大雑把に言って、近代小説は18世紀から19世紀にかけて作品世界に深さを創出する方法を洗練させ、20世紀に差し掛かってそのリアリスティックな深さを異化することを求めた。フェルスキ自身「懐疑の解釈学」の先例として、フロベールの紋切り型批判やダンディーといった形象、信用できない語り手などに言及しており、こうした論点への意識が伺えるように思うのだが、いずれにせよ小説史を舞台として「批判」の問題を検討し直すということは、小説研究者にとって興味を惹かれる試みであるはずだ。

第4章では少し視点が変わり、「批判」の状況論的、認識論的な位置、“critique”がいかに“Crrritique”となってしまうかが検討される。批判は「二次的」、「否定的」、「知的」であり、「下から来て」、「ライヴァルには耐えられない」。認識論的優位を誇る「批判」は、ほかの方法や気分に対して徹底的に不寛容であり、結果としてひどく硬直化してしまっている。もちろん「批判」が絶対悪だというのではない(それはまたもう一つの硬直化した批判を生むだけだ)。それしか選択肢がないことが問題なのだ。冒頭に拳

げた文学(部)の不幸の訴えに対するフェルスキの回答は、したがって明確だろう。社会や作品が悪いのではない。「我々」のやり方、言葉があまりに強張っていて、それが実際の読書体験に、ひいては現実の社会に応える柔軟性を失っていることが問題なのだ(この基本的な認識に私は賛同する)。

以上のような認識を示した上で、フェルスキは今後の指針として「ポストクリティーク的読解」を提案する(第5章)。ラトゥール派である彼女は、ブルーノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論に基づいて、批評家という主体に対してテキストという対象を、あるいは(新歴史主義的に)テキストに対して規定的なコンテキストを立てるのではなく、テキストや文学的装置にも共アクターとして一定の主体性を認めるような考え方にシフトしていったらどうかと言う。そこで一つ明確に打ち出されるのは、「ディタッチメント」から「アタッチメント」へという方向性だ。テキストが読者に対して引き起こす反応は、クールな距離をとった「批判」的なものだけであるはずがないのであり、そこには愛着や没入を含めた多様な感情、情動が発生している。テキストとのこの「アタッチト」な関係性にいわば現象学的な注意を向けていくことで、「批判」の強制力から読むことを解放していったらどうかというのである。

ここまでが『批判の限界』の要約だが、確認しておきたいのは、フェルスキは明示的に語っていないにせよ、彼女が「批判」の氾濫とみなしている現象は文学部の教室や研究雑誌に掲載された論文に限らず、現代社会において広く見られるということだ。フェルスキに先立って「批判」の袋小路を論じていたラトゥールが“Why Has Critique Run Out of Steam?”で主張していたように、「批判」はいまや左翼や一部のインテリの占有物ではなくなっているのであり、「深層」に隠されたイデオロギーを嗅ぎ取ろうとする「批判」実践者の身振りは、あらゆる場所に秘められた陰謀をかき取る「陰謀論」者のそれと、どこかで似通ってしまう。イヴ・セジウィックが“Paranoid Reading and Reparative Reading”で強調したように、批判(セジウィックのいう「パラノイア」)は人々に強い模倣の欲求を引き起こすという性質を持っており、結果としてそれは加速度的に伝染していく。陰謀論や「批判」が、デジタル技術のもたらしたSNSに媒介されて瞬く間に模

倣され伝染していく様子はもはや見慣れた光景であり、その意味で「批判」は現代人の日常を構成する基本要素の一つだとすら言えるかもしれない¹。こうした観点からすればフェルスキの『批判の限界』は、ひじょうに射程の広い問題提起を行った書物だと言うことができる。

このことを念頭に置いた上で、フェルスキの提案する「ポストクリティーク的読解」を検討してみよう。テキストを対象と捉えそこから距離を取って「批判」するのではなく、批評家が共アクターとしてのテキストと共同作業的に考えるというイメージ——これは批評と作品の地位を相対的に近づけることになるだろう——は、作品との一つの有効な関係のあり方を提供してくれるように思われる。この点について、フェルスキの議論と響き合う視点から批評史を捉え直すジョゼフ・ノースの *Literary Criticism: A Concise Political History* (2017) を参考にしてみよう。20世紀以降の批評史を、記述を志向する「学者的」(scholarly) アプローチと、読者に影響を与えることを志向する「批評的」(critical) アプローチの勢力争いと捉える彼の議論において、1980年代から現在に至る時期は——批評がもっとも政治化したとみなされる時期であるにも拘らず——史上初めて「学者的」アプローチの一人勝ちだった時代だとされる。ノースはこの時期支配的になった批評のモードを「歴史主義／コンテキスト主義パラダイム」と呼ぶのだが、これは作品が書かれた時代の文化状況の診断を批評の主要な目標だとする考え方であり、フェルスキが「批判」＝「懐疑の解釈学」と呼んだものと内容的にも時期的にもある程度対応している²。こうした見立てのもとで、ノースは「批評的」アプローチの復興を標榜するのだが、そこにはフェルスキの「ポストクリティーク的読解」が目指すところと似たものがあるように思われる。かつて「ナイーブに」信じられていた読者の人格涵養という文学の作用を現代的な形で蘇らせる試みには、文学テキストを分析対象としてのみ考えるのではなく、読者との共同作業に参加するアクターと捉える発想に近いところがあるように思うからだ。現在日本に暮らす評者の実感に引きつけて言うならば、「文学の危機」を引き受けた「文学」は、ともすればそれについて「知る」ことの価値を——それによって「考え」たり「変化」したりすることの価値に比して——過剰に強調されがちであるように思われる。そこではしばしば、作品の解釈や分析ですら「知識」にしかならない。

これに対して人がどう変わるか、人をどう変えるかこそが問題だという文学観はありうるし、それをアカデミックな言語でやり直せないかという試みは、少なくとも評者にとって、一定の共感を持って理解することができるものである。

他方、慎重に検討すべき点もちろんある。異なるもの間に思い切つて共通性を見出すタイプの議論の宿命として、どうしても元の議論の繊細さを損なってしまうがちだという点に関する問題がまず挙げられるだろう。三原芳秋は、リクールにおいて「懐疑の解釈学」は「意味の想起〔回復〕としての解釈」(63)と対であり、彼にとってはむしろ後者が重要だったのに北米では前者だけが取り上げられていること、ポストクリティークが檜玉にあげる「徴候的読解」は、元々アルチュセールにおいては「隠された意味」の「暴露」とは似て非なるもので、「<読む>実践を通じて主体自身の変容すること」(65-66)だったことなどを指摘している。特に後者については、あるテキスト(ここではアルチュセール)が、その精緻な読解からすれば誤読あるいは単純化だが、しかし確かにそこから出てきたという仕方で影響力を持つという現象一般について考えさせるところがあるが、いずれにせよ、そうした先行テキストの再読は、フェルススキの議論が出てきた今だからこそその発見をもたらす可能性もある。

しかし何より重要な問題を孕んでいるのは、今後に向けた提言の部分(第5章)だろう。フェルススキが打ち出す「ポストクリティーク的読解」の「ディタッチメント」から「アタッチメント」へという提案の単純さには、それこそ素朴に考えて、そのままの形では容易に受け入れがたいところがある。類例として、深層を読む方法に対して「表層的読解」をぶつけたシャロン・マーカスとスティーヴン・ベストの提案も、同様の印象を与えるものだ。もっとも、「単純さ」がそれ自体で欠陥だということになるわけではない。両者が共有するシンプルな「ひっくり返し」の身振りに表れている本当の問題は、彼らが現状への解決策として形式的なレベルでの「方法」を性急に求めすぎることであるように思われる。フェルススキ自身が実感しているはずだが、「批判」が常に同じように不調だったということはないし、「文学」が同じように「危機」だったということもあり得ない。むしろ「批判」が相対的にうまく機能していた時期があったはずだし、「危機」のあり方

は時代によって違ったはずだ。だとすれば、「批判」に代わる「方法」を求めると仮にしても、ただ方法のレベルで「批判」的なものの反対物に転じるのではなく、「批判」の何がどのように機能しなくなり、それがどのような条件の上にある失効なのかを地道に考えていくことの内側から、より有効な認識や考え方——それはおそらくただの「ひっくり返し」とは違う手触りのものになるはずだ——が浮かび上がってくるようなプロセスを経るしかないのではないか³。そしてフェルスキ自身、実際には言われるまでもなくそのつもりで、発展途上の提案として書いていたのかもしれないのだ(2020年9月現在、フェルスキによる5年ぶりの著書*Hooked: Art and Attachment*の近刊が予告されており、彼女が「アタッチメント」を追究する方向性で思索を進めていたことが推察される。本評の立場からは、同書の「アタッチメント」論が方法的なレベルでの「ディタッチメントの反対」に留まらないものとなっていること、その意味で『批判の限界』を更新するものとなっていることが期待される)。いずれにせよ本書は、文学批評内外に跨る現代の論点を明確にした上で思考を展開していくために、押さえておくべき一冊である。

*本稿には、2020年7月26日に行われたワークショップ「文学批評の再検討—ポストクリティークあるいは批評の再興?」(zoom、秦邦生司会)での発表「ポストクリティークの射程と展望—リタ・フェルスキ『批判の限界』を中心に」と重複する部分があります。

注

- 1 この辺りの事情については、評者の「批判の行方」(『エクリヲ vol.12』106-13頁、および、<http://ecrito.fever.jp/20200527220039>)も参照のこと。
- 2 したがってノースが「歴史主義／コンテクスト主義」と言うとき、それは「批判」を含んだ歴史主義(潮流の名称としては「新歴史主義」)を指しているのであって、古いタイプの実証的歴史主義(のみ)を指しているわけではない。また、フェルスキの「批判」同様ノースの「歴史主義／コンテクスト主義」も広く批評理論諸派によって共有されたパラダイムを指し示しており、「歴史研究」と冠されたもののみを指しているのではないことにも注意が必要である。
- 3 評者自身は、上記のワークショップにて、「ディタッチメント」と「アタッチメント」を「演劇性」と「没入」に読み替えた上で、両者の同時発生ないし往復に

において発生するフィクションの次元を考えることで、「深層」ないし「ディタッチメント」と真実が短絡してしまう現在の状況にアプローチできないかと提案した。

引用文献

- van den Akker, Robin, et al., editors. *Metamodernism: Historicity, Affect, and Depth After Postmodernism*. Rowman & Littlefield Intl., 2017.
- Best, Stephen and Sharon Marcus. "Surface Reading: An Introduction." *Representations* 108.1 (2009): 1-21.
- Felski, Rita. *The Limits of Critique*. U of Chicago P, 2015. (「序論」のみ、勝田悠紀訳、『エクリヲ vol.12』134-48頁)
- Latour, Bruno. "Why Has Critique Run Out of Steam? From Matters of Fact to Matters of Concern." *Critical Inquiry* 30 (2004): 225-48. (「批判はなぜ力を失ったのか——<厳然たる事実>から<議論を呼ぶ事実>へ」伊藤嘉高訳、『エクリヲ vol.12』198-230頁)
- North, Joseph. *Literary Criticism: A Concise Political History*. Harvard UP, 2017.
- Sedgwick, Eve. "Paranoid Reading and Reparative Reading, Or, You're So Paranoid, You Probably Think This Essay Is About You." *Touching Feeling*. Duke UP, 2003. pp. 123-52. (「パラノイア的読解と修復的読解、あるいは、とってもパラノイアなあなたのことだからこのエッセイも自分のことだと思ってるでしょ」岸まどか訳、『エクリヲ vol.12』152-94頁)
- エクリヲ編集部『エクリヲ vol.12』2020年。
- 三原芳秋「読む」『文学理論』三原芳秋、渡邊英理、鶴戸聡編、フィルムアート社、2020年、46-69頁。